

出定笑語講本

二

津田文庫
文庫 1
1576
2





出定笑語講本二

叔悉達の山小入て右の如く座禪觀想を為て終小甚の道
 と成就したると云て山と出たる年が三十歳の時であつ
 たる故あれを三十成道と云小下コヤン 俗小出山の釋迦の
 像とて破生衣と身小纏ひ瘦さらけつていろ粟坊主と山
 と下りあつたら風小吹せし後と振返て見て居る凄いやう
 不図が有る此の時成道して山と出る時の形を畫い
 たるの下コヤン 是ハ二十五の時うら三十より下り小依て
 ちやうと六年の修行てコヤン 斯て彼の石上を起て山と下
 り彼の車匿橋陳如の輩五人の居つたる波羅奈國へ來る
 と彼の五人の者共ハ悉達を食と受て食たる事を知て居



010190606460

る小依て互小語り令小ハ瞿曇棄捨苦行而受飲食之樂
所志不獲今既來此我等不須起迎之亦勿作禮敬と云ひ合
せて各默然として居つたが流石小そこへ来てハさうし
まうす彼是と世話やいたと云ふ事下マハル其時悉達ハ彼
の神通を以て早く五人の者の意を覺り汝等申合せて吾
と迎へまいと約束したるが申合せたる言小違
ハ斯くとりはやすと云つた所が五人が大き小驚いて
各ハ面を見合手持りた小前小進んで瞿曇行道得無疲
倦と云つたが悉達が云ふ小ハ汝等無上尊なる吾小對
て憍慢の情を以て姓を喚て瞿曇と云つたが不埒な事小
や子稱父母名於世儀中尚不可まして吾ハ此成就して

一切の父母とある者と姓を稱すと相すます汝等自ら惡
報を招みてあらふと嚴しく叱り付けたり云ん此の叱り
付た事ハ山うら出て来て手始めの事故うやう小まづ人
の己と輕んする情を抑へんが為小り人のむねとく新た
の心をなす事トやう此の姓と云つたる事を答めたと云ふ
のハ是ハ唐土の之を翻記する法師が唐の事小依て加へ
た事で姓と云ふと無礼とする事ハ天然小ハ無い下マハル
諸の佛經ふやうの事が多く有るうら氣を付けて見る
がより下マハル
扱五人の者共ハ斯くハ如くまめらきて大に小つこも顔
と赤うして我等ハ愚癡なる者共故往小見受まハた所ハ

人の飲食と受らねた小依て道の苦行小怠らねたのし
と存して不礼と致して云つた所を悉達が汝等小
智と振つて我が道の成と不成とを量る事勿れ抑と形小
苦有世心小惱亂し身小樂有世心情小著す小
依て苦樂とも小道を得る事成らぬら吾小其の中道
と行て暫く苦行とつとめ又飯食と受て斯くの如く物食
たり物食のあんたりの行と為たのやあ世皆已れ深
小存より有つて為たると下其の方共の知た事下い
今既小其の験小依て生老病死の患と離して
無上正覺
阿耨多羅三藐三菩提
の道と成就する事と得たるをと嚴しく叱り其の弱つた
所を彼の四諦十二因縁と云ふ事と細く説き聞らば種

種の神通と見せし無常小説き入れりも彼の者共と屈
服させたまふ此の阿闍と憍陳如の二人の弟子の中小
於てよく始小悟りたる故小第一の弟子と云ふや云ん
あり小五人の者のつ小我等今佛法小於て出家して
道と修せんと思ふと云つたる所を悉達がうまつて彼の
五人と善来比丘と一聲喚ぶと鬚も髪も自落てく
坊主とあり自小袈裟衣を身小著してやんと沙門の形と
成たて云んや等がらんと尾上松縁が早変りを見り心
地がすまふ何人と手裏に有りませ人の此の手妻と
違つて人とくり坊主小為たる事夥しく有るが其の一
つと云らば或長者の息子小名と耶舎と云ふ有つて何

の氣も無く女狂ひとして遊んで居たる所を坊主小僧は
手際が妙でユル彼の神通を以て自然と其の樂を欲し
心を生じさせまづみづくと外へ出る心持ふる家
外へ出ると空中に光明を赫して構の門も自然と開け
せられたるに叔耶舎の何れ知らずやしくし小世事が厭
しく苦く覺つて其の光明を尋て行くと其の路に河が有
る向ひ悉達が居所でユルおと耶舎の覺つずア苦
やと一聲云ふと即ち河向のうら聲と掛て耶舎汝使ふ來
るべし我小苦を離るゝの法有ると云ゆら河を渡り往
て見るく悉達の様は彼の三十二相八十種好らう云ふ顔
容で威有り丈高く見ゆるうらまづ平たく成て足を戴

吾等苦を救ひ給へと云ふそらうで色々ある所の事と
云て聞かして然らば其の法オムキ小歸きたりといふと悉達が
彼の善來比丘と一聲云ふと阿匿憍陳如等が様小自小髮
鬚が落て沙門の形と成る丈を尋て此の耶舎の又う來る
と又彼の神通下と云ふ心持してそれと吾ら道小引
入也又此の耶舎が友らする者共五十人と有た時耶舎が
縁小よつて是等も出家したく成るやう小仁うけて吾許
へつり寄せて説法して叔出家したいと云ふと直小善來
比丘といふと五十人が一時小右の如くうり坊主小
万でユル斯くつて殿々小人とく坊主小
万是が必ア何と名付やうの無い山事下ユル叔其の山

事の妄説釋迦の悟り得たるといつる趣ハ此天地ハまた
無りり百千億万の前世よりの事實及び人物の有初
り其の又母兄弟妻子眷屬又貧富貴賤壽命の長き短き又
其の姓名又造す所の善惡又報今の何某ハ古一の誰
此所の何某ハ彼所の何某小生と或ハ鳥小生と出小生と
て居ると云ふ事又人の賢者と愚者と顔の醜と美と醜
さも悉く小故ある事あると始め又人死して其の所行
の善惡小依て天上人間地獄畜生餓鬼の五道小別うせ行
く事小分其の人間小生れて始め胎小託らんとする事
又母和合即ち不淨と以て體とる小生れ出して老病死
其の外種々の苦あり又地獄小墮すてハ或ハ洋銅灌口シラカ或抱

銅柱或卧鐵牀或以鐵鑊而煎煮之或以火上而加串炙或為
席狼鷹犬所食或有避火依於樹下樹葉墮落皆成刀劍割截
其身或以斧鋸解割肢體或擲熱沸灰河之中或復擲熱屎坑
中受如是等種々諸苦又畜生小生れてハ雜の醜形とす
け或ハ骨肉皮毛の為小殺され或ハ人の為小重擔を負ひ
餓渴して人らと知る者なく或ハ其の鼻を穿たせ或ハ
其の首小鈎おたせるとの苦トミとなく又餓鬼ハ恒小啼
中小居て日月の光と靦ること能はず形を受る事長く大
きく腹ハ大山の如く頭ハ鐵の如く口中常小火燃え出
て常小餓渴と苦のどし千億百歳食を得る事能はず雨の
灑く小値ハバそれを変じて火の珠と成り海河終つて水

小臨のバ其の水化して熱銅焦炭となり身と動いて歩行
す此バ肢體節より悉く火燃え出つたは皆為本造慳貪
積財不施故今者受斯罪報若人見彼受此苦痛宜應惠施
勿生悟愍設便無財亦應割肉以用布施又諸天小生るハ
其の身清淨小して塵垢を受ず瑠璃の如く大光明有つて
目瞬る心常小歡悦して通ハするの事なく天樂を奏し
て娛ミ晝夜を識らず四方盡く絶妙るらすと云ふ事なく
衣服飲食亦小應て即ち至る然れ共天福盡るの時あり
て命終り彼の天身を捨て三惡道小墮ること有る吾が
終り得たる道ハ人なる事小ゆるい生死の相と離れて一
切智と成り甚深なる故小一切の衆生ハ解り難く入り

難し唯佛與佛よく此を知とおとすけたりてコト
此の如く一切の事をさすつた者と云ふの義下佛といひ
此其の道と佛道と云ふてヨリ佛といハ天竺の詞を翻譯
名義集小依て之を見れば佛陀と云ふハ云智者覺者と有
るにらさとつた人と云ふ事下ヨリ扱此の佛道といふ事
と云ふ小付けてハ古きより所と指してハ杜撰小おち
て人の信せぬころ過去の七佛といふを作りしれハ過去
の世人壽八萬歳の時小燃燈佛と云ふ佛が世小出た次小
人壽七萬歳の時尸棄佛と云ふ小出せし次小人壽六萬歳
の時小毘舍波佛と云ふ小出せし次小人壽四萬歳の時小
拘樓孫佛と云ふ小出せし次小人壽三萬歳の時拘那含佛

と云ふが出世し次小人壽二萬歳の時迦葉波佛といふが
出世したり吾今人壽百歳の時小出世して最正覺を成せ
り抑も佛ハ天上天下の至尊あるが故小梵天王帝釋天も
隨從して命を聞くと大言を吐出し彼の修し得たる神通
を以て梵天王帝釋天杯の形を現し所謂佛足頂禮とし
て己を尊小体小見せらる是ハ今までの婆羅門の立たる教
の趣ハ古傳のまゝ小梵天を尊んで夫小奉事し其の修す
る所も天小生するを極意とするを破り又國人も普く梵
天を識て世間の祖父とて又大梵天ハ万物を生するの本
也と心得て皆波羅門等が説を信するもの多し其の鼻
をひ刺し下己を新なり道を弘めんとしての事でも其
極其

の過去の七佛々やうハ更小聞も及ぬ佛名もやうさそ
ろり久しき以前の事とぞわして知て居るものとといふ
元來吾ハ阿僧祇と云て限りも毎百遠き昔小國王であつ
たる所が菩提の道を得んが為小難行苦行をして其の功
徳積りて一切種智といふを得て兜率天と云ふ天小生
きて其名と聖善白菩薩と云つて則ち天の諸神を教導し
て居つたる所が時到了たる小ちつて又此の國土小生れ
來て廣く衆生を濟度せんとしてまづ其の生るべき國ハ何
所小しとていつ事又ハ其の生るべき家より及び其の
父母とすべし人扱ふとて觀したる所が天竺國の中小
迦毘羅衛國ハ誠小國土の真中で十二遊經 因果經小越したる

地がある天上天下唯我獨尊の身として外の邊地も生る
る事であるといふとまづ觀し其の國の淨飯王ハ甘蔗王
の苗裔で夫婦として小吾が父母小頼む不足る又其の妻摩
耶夫人ハ壽命が短く来何月の何日小死ぬつと云ふ事
は彼が腹を借りて世小生れよと云ふ事道と觀し其
の腹へ假小宿て出せしたる者ト云つて尚ほ疑ふ者
小いざ其の證を見せんと彼の大神通を現しして大地
の震動する如く思ひせ大地が割れると其の地中より一
つの塔が湧出する其の塔の中小彼の過去の七佛と立
たる中の佛杯を居て善哉々と云て今釋迦の説る如く相
違ふ事下吾ハ今より過去三十一劫の昔人壽七萬歳の

時出世したり尸棄如来あり疑ふ事勿れ杯と云ひする又
吾ハ早き昔より成佛して兜率天小居たる者ト云ひし
を疑ふ者小示さんとてハ眉間より大光明を發して其の
光明の中小兜率天の有り様を現し諸天神が吾を尊敬
して仕ふる相を見せし瞻をつかさせ此の外小ハ地獄と
疑ふ者小ハ地獄の有り様を見せ餓鬼道と云ふを信せぬ
者小ハ餓鬼道の様を見せ又乾達婆城と云つて此の海中
小其の住所があるといふを信せぬ者おバウが来其様
を見せんと伴て海底小入り歩み入る叔乾達婆城一行
くと龍王が出迎て佛足頂礼をする斯の如きの相と現す
る事ハ皆その修し得たる幻術を以て現し見する事下

其の逐一の事ハ中々二席や三席ハ申盡さる事ハ不
いふは是ハ不推して知るべし事ト云ハルヤウ致しつゝ頓
と人ト惑りて己ハ新なり道ハ歸依させたまふて云
り孰共既ハ其の世の人等ト心有るハ誹謗して佛智慧不
出於人但以幻術惑せと云つたと云ふ事ト龍樹ハ大論ハ
記して有るト云ハル斯くしつゝ吾より前ハ道ト説たる者
共ト云ハルハ道の外あると云ふの意を以て総て外道ト
名付け芥の如くハ賤しめたまふ世の人ハ外道といハ
ハ何ハ怖しく角ト生えて居る者のやうハ思つて居る
ハ是ハ釋迦の説出たる佛道の外ハ道ト云ハルハ意ハ儒
者ハ儒道の外ある道トハ異端ト云ハルハ同ト事ト云ハル但

斯の如く諸ろの外道トハ押捺め云ハ破つた事孰共其の
世ヤト並び行ハれて心有る者ハ皆元の儘ハ婆羅門の説
ト用つたる事ト見ふるト云ハル是ハさう有るト云ハルハ婆
羅門共の説く所ハ彼の國の古傳説ト云ハル今ある實事
ト見て道と論ハ親妻子ト其儘有る愛情ト捨てぬとの故
いとゞ其國ハ生ハ付るの道ト云ハル然るハ釋迦ハ云たる
趣ハ彼の婆羅門共の謂ゆる天堂地獄因果報應治心等ト
の説ハ理ある事ト云ハル破られぬやう其れありハ竊人ト
我物ト云ハル其の中生天の説を破つて卑くしつゝ親妻子
の愛情ト云ハル捨て生死の海と出ると云ふ事ト加たる
のミの事ト其の加たる所ハ総て無理ある事共故らハの

譯を辨へたしめハ釋迦を説小ハチウ收管の事ユリソ
秋故並ひ行秋たしめ小ユリ又玄峠法師ハ西域記小依て
考ふる小此の法師ハ彼國ハ渡つたる時今ハ佛法ハ婆羅
門の道よりと大ニ小衰へた様子小見ゆる夫秋ハ西
域記小天祠と云て梵天を祭たる祠ハ國々小幾らとあり
有る様子だが佛塔ハ夫よりと少ありやうするを以て
考ふるがよろしハ下ユリ叔斯の如く大山事と工夫して
とみ釋迦ハまづ一大家と成て國々を歩く所ハ彼の婆
羅門の輩も多くしめりて弟子と成つたるが多し中ハ
摩偈陀國の王舍城といふ所小摩訶迦葉と云ふ婆羅門が
ある是ハ其の父ある者ハ甚の大富長者で天竺の内小十

六大國と名ふあ小國十六有つて其の國々小肩と並ふる
者ハありつたと云ふ事ユリハむと婆羅門の家柄ハ彼の
古より有り來たる生天治心の學問を致して迦葉ハ弟子
の五百人餘りも有つたてユリ爰小釋迦を思ふ小ハ彼の
兄弟三人の者ハ佛道を學で國王臣民悉く信ずる者ハ又
聰明ある者故彼説と吾ら下小付けたらん小ハ廣く人と
濟度するの力小あるづ者をも思ふてこの摩偈陀國ハ
行て日暮ハ迦葉ハ住所一行たてユリ所ハ迦葉ハ出て年
少沙門とありつ來たと云ふ所ユリ釋迦ハ吾ハ波羅奈國
より來れりが日暮たる故一宿を頼むと云ふ所ユリ迦
葉ハ宿を借して其の留たる晩うら種々の神通を行ふて

迦葉とおどろいたる事終て十八度其の中小まが迦葉等
が第一と尊む所の梵天に毎夜来て釋迦の説法を聞く佛
足頂礼杯とするら就小膳を潰して居る所と又婆羅門の
法小火小事一ると云て晨朝小火燃して供養する法有
るそら午彼の五百人の弟子共晨朝小火を燃さんとす
る小燃ぬら膳をつぎて迦葉小云ふと是は彼の沙門
の所為であらふと云て其の事を釋迦小云ふに還去は火
が自ら小燃りてあらふと云ふら還て見ると火は燃る
叔供養畢て其火を滅さんとする所をいつらふら
そら迦葉其の事を釋迦小云ふと汝還て火は自ら滅
るてあらふと云ふ還て見ると消えて居る又威時迦葉

の許に摩揭陀國の王と始の多くの人が来て七日會と云
ふ事と為す時小迦葉が心小此の年少の沙門と相好太
麗し小因て是を見たりは會つたる輩を吾と捨て是
と信ずも心小あらふと知れぬらと云ふ此の沙門が七
日の間吾が所小来て吳鉢ねばと云ふと釋迦其心
を直小覺つて何所へ行て七日還らす小居る叔七日と
過り會と訖てら迦葉が思ふ小彼の沙門が七日来て
吳鉢人で大さ小うたふ今茲小集會の餘饌があるら
歸つたら是を食らうたものやと思ふら早く釋迦
が即ち其心を知てひらり直小歸て迦葉が前一来た
てころ迦葉が大事小驚いて汝此の七日をうり何所一遊

行したるとそと聞ふ所を釋迦が此の程の集會小つきて
そちが心中小吾と忘む氣の有つたる故餘所へ往たが汝
今心小吾と来れうと思つた小依て還來たのちやと云
みくら星とそ、おの迦葉がたけいことう身の色と
堅つ程驚いたる中々伏る心ある此の沙門年といふんて
うる奇特ある事とするうらうと吾が真ある小ハ
あふまのと思つたる有る下ニナル叔釋迦ハ右の如く威と
りたる事経て十八度して今日らそ彼を伏すすつ日
と云ふ事を念ひ定め河小入てうの神通下水と左右へ
開いたる桶小見せ其所小居ると迦葉ハ遙く小見て是
ハ沙門が水小溺れたと見えると云て弟子共と船小乗て

漕寄て見ると水と左右小開け其の水止小立て居るうら
又膽と潰したるのやまた、吾が道の真小ハ及ふまの
思つて居る叔汝船へ上らんと欲ふと問つた然りと云
て船の底うらちのいゝと入て結伽跏座して居るそらて迦
葉が船底小空下と有らうと思つて見る所が穴も無い
ら又膽と潰して居る何また穴があるもの底うら這入
たと見せて噴ハ上うら上つたものでニナル彼の手裏遣ひ
が脇指と吞かと見せ此所小有りと云て懐うら出すと
同下譯でニナルそら下釋迦がうらうと思つて汝不知道證
胡為起大我慢稱我有道德と云つたる所が迦葉が誠小慚
入て如是沙門如是大仙願攝受於吾と云ふ時小釋迦が云

あふハ汝年既老テ百二十歳アリ又弟子眷属と多く國王
臣民の爲小敬せらるゝ事故著シ決定シテ吾法小歸せん
と欲スムヨク弟子共と評論シテこの事小シヤキと云
つたる所ヲ迦葉ハ實シト云テ弟子共を集の彼の年少
の沙門ハ中々大抵の者ハ吾ハ及けぬ者故吾今其法
小歸せんと思小汝等ハ心ハ如何小と云ふと弟子共の云
ふ小ハ吾等ハ知たる事共ハ尊者の恩ハ覺たる事故彼の
沙門ハ尊者の信するハ吾等ハ共小歸依シム小と云
ふハ引連テ釋迦ハ前小出テト其の弟子ハ多ク人
事ハ云ハバ釋迦ハ又例の如く善來比丘ト云ふと迦葉ハ
始五百人の弟子共一度小鬚髪ハ落チ袈裟衣ハ身小着テ

即沙門と成ツカシテ是ハ見テ迦葉小二人の弟子ハ有
テ各ハ弟子ハ二百人五十人程ハ有リたハ是等ハ弟
子小成テくり坊主小成サれる迦葉一人ハ伏スた斗
リテ暫クの間小千人余リも善來比丘トなりテ又ハ叔ハ爲シ迦
葉及テ弟子ハ現レ大神変ハ又應ニ其心ハ而爲シ說法ハと有リテ斯ク新ク
小人を消度シたる時の状ハ見クらズ所ハいつテ先
づ神通ハ膽ハ潰レセ信ト起リテ叔ハ弟子小成タリト一
言云ハ小ハ其言ハの変ハぬウチ小手早く善來比丘トナリテそ
らハ彼の大神変ハ現レテ說法スル其の大神変ハといふハ
說法の時大地ハ震動シテ異類異形の物ハ涌出シテ說法
と聞キ又天上ヨリ花ハと降リ音樂杯ハ奏シテ諸天ハ下下

其の説法と讃る是ハ皆其の者共小信と起させんとす
る幻術ト云ハ則本文小為迦葉及諸弟子現大神変ト有る
と考一見るふよハ又梵天及び諸ろ異類異形の物
の現出する事ハ先キ申たる瑞應本起經小能分一身作百
作千至億万無数と有る如く近ハ狐不人小化て色々
ものを出して見すると何と変りハふいで云ハ
扱釋迦ハ迦葉と骨折て伏させたる事ハ先キ云ハ如く
此の者ハ年と云ハバ釋迦よりハ四ろ倍下百二十歳家
柄と云ハ富榮ハ其の眷属と多く修行ハ八十年して釋迦
が出ぬまハ神通廣大下中々其の世小遠の立つ者多く
國々の王共と始め世小ハ大層用つら出て居る小依て此

の者一人と伏させ弟子小す此ハ其を信する輩とハ
皆坊主小ハ云ハ小成ると云ハ見込下致した事ハ
コハ夫故外の弟子とハ違ふて迦葉とハ殊更小敬ひ来れ
ハ出迎ひるとも致し又久しく乞食をして衣ハつとせと
ありさう云ハ杯も長くもやして見苦しと体て釋迦の所
へ来たる時と迦葉と見知らぬ外の弟子共ハ迦葉と侮
り陋める者も有る其の節釋迦ハ自今の半坐を分けて迦
葉と座せしめ大ニ其の功德と賞て我と異ある事
と申たる事も有り又釋迦と迦葉と同座を致したる折杯
ハ人々咸釋迦ハ師下迦葉ハ弟子と成つたと云ハと疑つ
て信せず迦葉ハ大智慧有つて普く世の人を敬ひ信する

所何よりて年少の沙門が弟子と成らふかと云つた事と云で
コヤんいふさま迦葉八年と釋迦の四さう倍あり釋迦の教
ふ様子うたぐ何とと左様小思ふたりふでコヤん其の時釋
迦ハ早く其の心を悟て迦葉小汝とるくの神変と現せせ
といふと迦葉ハ即ち虚空小昇て身上よりハ水と出―身
下よりハ火と出―又身上より火と出―身下より水と出
―或ハ大身と現―て虚空の中小満て―め又小身と現ト
或ハ一身と分て無量身とる―或ハ身と没―て地小入り
又虚空中小踊出て行住坐卧す衆人ら孰と見て目と驚―
未曾有未曾有と稱歎―てう程の大仙かごうて沙門瞿
曇の弟と成らふと云てあると迦葉ハ空中うら下て釋迦

の前小至て頭面礼足と云て其のつむり小釋迦の足との
せ頂のて礼とあり世尊ハ實小是秋天人之師我ハ實小其
の弟子といゆう衆人膽を潰すて斯の如く大阿羅漢の
人と弟子小するといふさすさバ釋迦ハすささ―の者かと
信伏したといふこととコヤん實小迦葉が今教したる神通
の十倍と釋迦の神変ハま―てさるうらまづいふのたえ
扱ら秋よりま―其の説と弘めて彼の智慧第一の舍利
弗神通第一の目捷連又目連共云ふあると始め盡く弟子ヤ―て扱
已分道の掟と立たてコヤル秋ハこの誰と知て居る殺
生偷盜邪婬妄語飲酒の五戒と始め種々の戒めと立て其
の道小入り出家したる者ハ乞食といつて人の門小立て

今の世の僧とある如く餘り物を貰つて命をつないで居
る下ニカル但しこれれは法が有てまづ乞食する譯ハ一切
の橋慢の心を止させよふが爲にやとつて其の貰
つて來たる物と四つに分け一つハ同行の僧共ニ與へ一
つハ窮乞人とつて物とらうつて來ぬ人ニ與へ一つハ
これハ諸の鬼神小供へ残り一つを自分の食料として其
の喰ふ少し度々いふもんで其の戒めニ飲食譬如人身病
腹藥令其愈不得貪着と云ひ又一日一食不得再食とも有
り下ニカル又次第乞食の法とつて事と有る夫ハ一日一つ
小ハ日々小一家小到り食を得ると云ふを食つて是らん
下ニカル又二つ小ハ次第七家小到り食と貰へば食つ

て又足らん時ハ云ふ云ふ三つ小ハ次第家より家小到
り食小程あるハ夫下おく又の日乞食小出る時ハ先小行
止つた家より又貰ひ始めると云ふ此の外小乞食とする
法は色々有つてちよつとつてはこれぬらと下ニカル又此の
乞食とつて言はハ天竺の譯下ハ分衛とつて下ニカル夫を
漢土のことばハ翻譯すると乞食とつて下ニカル成る下ニ
今の世小僧の物貰つた歩くとハ乞食とつて下ニカル然も其人
共の物貰つて歩くはちよつと乞食とつて下ニカル然も其人
の門下立て物貰つて歩くことハ古ハハらんとあるら
たうとて元來佛法が渡つてちよつと僧共が物を貰つて歩く
と見せぬやあるハある者共が其の多様とつた者で下ニカル

去社ハ乞食の本家ハ坊主下其の坊主ハ乞食として食ふ
ことを教へ法とも立たるハ釋迦で自分も元より乞食と
して歩いて乞食しやハ依て正直ハ自ら乞食しやと佛書
ハ云つて有る下云ハ去社ハ今の非人共の爲ハ釋迦ハ
きつくりい事としておいたもの下云ハウ、非人の所の
庭を見ると祠らのやうハ作て白山権現とらりあを祭つ
て有る様子だぞ人ハ聞けハあれハ乞食の開祖しやと云
ふ事ハやハ何とのう知らぬハ是ハ釋迦を祭るべき事ハ
コト然ルハ今の坊主ハくらひをばへて乞食として歩
みながら本を忘れて門ハ立つた時出ぬぞと云ふと大
き小おこつて已社ハ乞食でハあると云ふハウヤリヤけ

うらぬ心得違ひある下云ハ扱衣服ハ社も甚だ色々
の譯があるハ社も一體納衣とらりものとして着るが本と
あのらとて釋迦の教へで云ハ夫ハ糞掃衣と云ふ元
ハ人の捨てたものを拾つて着るもので云ハ社も四分律と
いつて佛法の戒めを盡したるものの中ハ牛嚼衣羊嚼衣
火燒衣月水衣産婦衣其の外裡死人衣往還衣塚間衣の類
ハ尚ほ種々有つて夫を洗ひ袈裟色と云ふハ海めて着る
で云ハ此の袈裟色と云ふハ総つて天竺の言ハ物の色目
の正しう入りまりつたる色を袈裟と云ふハ穢社ハ
リヤ元來出家の服と云ふハ右の通り色々穢社ハ
ことなる物と拾ひ集めてする物故其の色が正しく云い

夫故袈裟といつたもので元來ハ上中下の三衣と通じて
云つたる所と後世ハ襟元ハ引ける物よりと袈裟
と云ふ則ちあれハ天竺で出家の衣服の惣名で云ふると
と今ハ結構ある金襴錦糸といふ類ひでするハ大抵ハ釋
迦の意といふたつてとる下云ハ叔又律の中ハ彌沙塞律
といふ所有る夫ハ汝等比丘雜類出家皆捨本姓稱釋子沙
門といつた有る法師共の釋子といふハこれ故下云ハ
叔右の如く法を立て衆生を導きたり坊主なりて廻つ
たるらと云ふハ六年此の時父淨飯王ハ吾が子の成道出
山したるらと傳へ聞いて此の方六年ある所を未だ相
見ず甚だ戀しく思つて優陀耶といふ者と呼んで申付るハ

ハ吾が子ハ別してより以來十二年ハあるハ夙夜ハ其の
愛慕の心止す逢まはらば思ふ程ハ其方より一行て迎
へ來せと申付た下云ハ優陀耶其の者と云けて釋迦の許
ハ至りつばさハ淨飯王の意を述べたる所ハ其の梯子の
嚴重で彼の梵天帝釋とて其命を聞いて居るさま故こ
いつ又出家したと云ひ出した下云ハすると彼の比
丘來と一聲云けると例の如く髮鬚悉く落て沙門とある
時其餘所度不可稱計と有るら此時と夥しく坊主ハ
たと見える下云ハ叔心ハ思ふやうハ今若還國無所感動
所化抄少先遣優陀耶顯神足て吾が往んとするらと知
らうめう道心と發起せうめうで吾が往て導いたるら

ハ度する所が多うらふと思ひ定めて優陀耶ウツタヤハウツヤウ
ハ吾今本國ウツ歸キるべり執シツるも國人の信ずまシまシと
恐オソるコトハ汝ニマシつ神足シツと以て虚空ウツと行ユく神変シと現ハル
たカらウバ新來シの弟子シすラるコトハ神変シと為スるコトハ
佛ハ威徳無量シとハありふと信シり受ルるコトハありふと云
つた所ハ優陀耶ハ其者トうけ飛行シして虚空ハ登リ本國
迦毘羅衛城ハの上ハ到リつて彼の迦葉ハ虚空ハ登リて致シ
たる如クハ神通ハ花々トくハやつたる所ハ國中ハの者皆ハ口
あんコトとありて虚空ハとあるコトハ大キ魂消テ感心シて
釋迦ハ得ル道ノ尊クと知ルたコトハウツ下ニ此時優
陀耶ハ任スりタリと思フて淨飯王ハ前ハ出ルると王ハ

吾ハ子ハいつ還ルるコトハウツ中ニ七日ハバウツりハ來ルん
と云フバ王ハ踊リ上リて大キ喜ビ國中ハ觸レ道ト
淨クの地ハ香汁ト灑リ幡蓋ト暨テ日ト教テ侍テ居ル時
小釋迦ハ其ノ日ハ成ツて諸ノ弟子ハ告テ今日ハ本國ハ
還テ父王ハ見ヘる程ハ殊ハ衣服ト嚴整シて供ト致セ
といつて彼の梵天ト右ハ現レ帝釋ト左ハ現レ彼の須彌
の四天王ト云フ毘沙門ノ尊ト前ハ現レ從リせ又諸
の弟子共とバ悉ク後ハ立セ其ノ外諸ノ天龍神等と云フ
者ノ形ト影ト現レて夫ハ或ハ香花ト捧ケさせ又ハ樂
と奏リさせ自ラハ彼ノ大光明ト發シて三十二相黄金
の肌ト見セ大地震動ノ神通ト行ハ事六及シて足ハ九ト

地を踏す中を歩いて迦毘羅衛國へ到つた下ニヤル此時父
の淨飯王ハ諸方の目下と共に遠く出迎つて平卧して此
尊有様を親て喜び泣き泣出したと云ふこと下ニヤル是
ハさうとありやう斯く平卧して居る所へ釋迦ハ中と
歩いて来ること故ちやうと淨飯王の額の所へ足を来て
あること下彼の頭面禮足と云ふて足と頂くの礼と又小
さしたとの下ニヤル分別功德經と云ふもの小佛還本土足
升空行與人頭齋使父王接足而已不欲屈身と有るハ此事
下ニヤル一俤天竺の礼と云ふものハ合掌トや偏袒右肩ト
や結迦跣座トやと云ふ類を総て九の通り有る其の中小
此の足と頂くの礼といつち尊ぶの形を下まづ貴人小出

逢た時稽首と云つて地へたへ首を付け扱其間が近り執
バ其の踵を扱又足を常^{カフ}でニヤルすると其貴人ハ手を
出して其の足をねめる者のつむりと換てさすつてさ
だ替る事もあるいと云ふやう小辭をさける是ら則ち其
の拜礼を受たるものうたち下諸の經小佛足頂礼又頭面礼
足ある有るハ此の事下ニヤル何んと是も國柄相應の礼
ら仕方あるれ共扱々親たる者小足を頂うせねあらずと
云ふハ人たる者の忍び難く出来ぬ事トやの釋迦もこ
らハ真小豪傑下ニヤル扱々様致したハ皆佛程尊の者ハ毎
い又小すら足を頂うすると人小信と發させんが為で
又此の時とろくの樂着る皆おのうら小鳴り婦女の珠

妻といふ女を迎へる時小調達と夫小心をうけて居つた
あはれとし釋迦ふらりたるより始終を執る根とあつて
中よりうらたと見えりてまゝとあつて争ひを募て是は釋
迦の神通で焼殺さしたるを此の時釋迦が其の親族
共と弟子小致したる神変又無理やうたつた出家させた
る者多し中ふいと憐むべきは釋迦が毘羅衛國の尼
拘類園といふふちつて城内小入て乞食とて歩いた所
が其の弟の難陀といふふ有て是は彼の摩訶婆闍婆提の
生んだ子で三十二年と一向若くて高の所より見ると釋迦
が乞食するを見て下て來て云ふは佛の刹帝利の王種
とありふらう自ら鉢と持て乞食とするはとやあると恥

しめて其の鉢へ飲食を入れてやうたが三十二年釋迦が却て
最早彼れと比丘來してやうんとし心お起て弟子共
ホ云ふは彼れが居所へ乞食小行てもよく彼れが此の方
の鉢と受取物を入れて出したるありば夫を取らずに還り
來れ必其の所へ來るべし我はくは有るありと云てやう
たを所を果して其計の如く難陀が鉢と受取て物と吳れ
たを執共行た奴が夫と受取らんから難陀がついて來る
時小難陀の婦小孫陀利といふ有つたが其の出る時云
ふふは速小歸るべしといふことと返々云つたは是は釋
迦が許一行たための坊主小まねぬといふはあつたは吾
夫とらんを目小逢ふはあつたといふ心て有つたといふ

事でユカレるに難陀が釋迦の許へ行て鉢を置て歸らふ
とする所が釋迦が云ふ小の許すて小ら、小来る今より
しく鬚髪を剃除て三法衣を服すべし何ぞ還らんとし
そと以て威神力逼難陀令出家。閑在静室と有り又佛即命
剃師剃髮難陀不肯怒拳而言迦毘羅衛一切人民汝今盡可
剃其髮也と云つた事と有り。うら無理やうたの小威一掠
の責つめえ坊主よりてうはいそり小年といふぬ者と押
籠て座鋪穿の様を所へまらうんだのてユカレるに久々
あつて難陀が閑暇を見て逃て家小歸らふと窺ひ竊小遁
釈て大望を行て、釋迦小逢ふと、釈すと小徑よりそ
らそ逃ると頃て釋迦が釈と知て行く向よりう廻つて

来たてユカレるに、あうん、うら木の蔭へ隠れんと
すると釋迦が神通て其の木を根より抜倒したてユカレる
らで其の木を抜た穴へ隠れ居ると釋迦がそら一来て
あせふら、一来たといふうら膽魂を抜れてあといわあ
あく所を汝といこ一行小と思ふといふあり、家
小還て婦小逢ひたかあり、此時釋迦が云ふ小ハ
吾今將汝天上小到て觀せよ、うら怖る、あといひま
彼の神変下頃と天上小行せ上るやう小思ふせ、たてユカレ
叔難陀ハ釋迦と俱小其の天上小上て一つの宮殿と見る
と其の莊嚴の麗しく其の樂きこと云ふ可い、うらすら小
一人の玉女と云て玉の如く麗き、天女が居てそ釈小夫

とおほしき者かといふ難陀があやしく思つて是は
うなる事不問ふたは釋迦がち自身不問ふといふ
うら自ら其の天女不問ふた所を天女答つて汝不知乎
迦毘羅衛國釋迦文佛之並父弟難陀後當生此為吾夫主と
答つたてこるるこで難陀も宿る不少うおしくあつて
来たてこる此時釋迦が云ふ不ハ此の譯すや不依て快く
出家道を修せよ久うすうて汝ら、不生れ彼の玉女
を婦やうて福を受る事無量であうふと云ふ扱又地獄
の状を現して見せたてこる其の有様上不申たる如く見
る不堪うた苦しいのみ有る中不一つの大鏡が掛け
て夫不獄卒大勢取巻いて湯とたきらして居るが羅人^羅が

見えぬそこ難陀があはれハいこうよと問ふたは釋迦が
云ふ不ハ汝自ら獄卒共不問ふと云ふう問ふ時不其の
獄卒共が答つて迦毘羅衛國の釋迦文佛の並父弟不難陀
と云ふ者有りくとるり放逸して媼欲の情多し渠が命
終て後まきくら、不來ら、其の時煮んが為不設け置
くりやとつたてこる爰不於て難陀が身毛と豎て顔色
変つて恐むる多し、不獄卒共が留りゆとて云てハあら
ぬと思つて南無佛陀南無佛陀唯願將吾還り給へと云て
袖不すううて是うら媼と出家する氣多うたといふこ
とてこるらうらの神通のさまら媼と老狐が人を化す有
様不爰りいふい下こる

又吾が子羅睺羅と出家せんとすつて弟子の目連と耶
輸陀羅が所へ遣したる所を耶輸が子小の吾が夫太子
たる時吾を娶て妻とすたり吾が小は一つ
失とるく未だ三年と満ざる小家と出て逃去り父王自
ら往きて迎へんと其の命小違度て征ふらず鹿皮の衣を着
て其さま狂人の如く山澤小隠れ居て勤苦する事六年成
道して國小還れんと親を顧みず恩旧を忘るること路人
より劇く吾が母子とて孤と守り窮と抱うし今又使
と遣して吾が子を求め其の眷属とるさんとするは何と
てこの如く酷く吾不成道して自ら慈悲と也と言ひ
る慈悲の道は衆生と安樂せむ今及て人の母子と

離別せんとう苦の中よと甚しき恩愛離別の苦小若た
るはるはるを以て之と推考ある小佛小何の慈悲と有
らんといふ是は一々至極心とある云ひあんな下ヤんそこ
で目連の種々と諭し諫むるも其耶輸陀羅更小聞入ぬ
下ヤん爰小於て目連と困まりたり此事と浄飯王小云
つたる所を浄飯王の其の妻摩訶波闍婆提とやつて諭さ
せたる所を耶輸といつる小聞入れず吾家小在る時八國
の王より請小来たる小許さず太子の父
藝人小過てとる事故父母が許してさう一嫁りたる小
太子其の時世小住せず出家學道せんとあらばあるせ小怨
ろ小吾を求めてある不ろ其人の婦と娶り恩好聚集歡樂

と云ふて万世相承き子孫相續て紹繼宗嗣の世の正礼を
り太子既小去て又羅睺と求めて出家せしめ永く國嗣を
絶んと欲すに如何の義ありやと云ふに摩訶波闍婆提と
此の言をしののけ理あり小反す言もふく默然とすたと
云ふ事なごん爰小於てと云ふありんごら釋迦の例の神
通下空中小聲を響きて耶輸陀羅汝いふ小遺れたるを
往古の世小吾汝より五莖の蓮花と買取れる小汝世と
も小吾の妻とありん事を求む吾も汝と聞入す汝も一
切布施して意小逆らひす小吾も妻と成ることを許さ
んと云ひし小汝誓を立て世々生る所の國城及び生め
る子又吾身も君小隨て施與して悔る心ありんといふ

り然る小今ある小羅睺と愛情して出家せしめさると
云つたごん小汝が不測でごん耶輸陀其の語を聞いて
自然と如何あり前世小さう約束してありらると胸小浮
んで今も下斯く拒んだことゝ氣の毒の心持小成つて羅
睺を出家させたくあつて目連小渡したでごんをさう
まもると羅睺も出家してしまつたでごんも人と佛
道の仕方面白く事なまりまもいふ今でも此通り知
れど致さぬ現世未來の因果話して愚人も鼻をすくらせ
て佛信心のふえり様小致したものでごんも仕方面白
く下ごん

此三界と云ふと出て天地の外物と成らふとする事故
君父と捨妻子の愛情とも淨く離れねば得らぬと云
ふの教で真の人間は頼と出来ぬ事である然るに後世
は出来たる佛經や諸論は是とさしあらずも小のつて
有るは此としりや釋迦の本意では無い論より
謹抑し既小釋迦が成道出山して國へ還り神通やら説法
やらで其の父淨飯王並ひ小あのが妻と不承知ある所の
彼の羅睺羅とまづ出家せしめ叔近き親屬は残らずと云
ふ程のこと同一流社の一家八万四千人と弟子とあり其
後と國中の人々と残す僧小せんとするも一た下ニヤンと云
の事あるは此を父の淨飯王が釋迦小ありては此でハ

國計永絶といつたことと經文小見えあると云ふは
人の真の道はさるるや邪さの道であるといふ叔は如
う小説弘め云ひ散らなる年數は凡そ四十餘年の間下
叔釋迦は諸の弟子共といふ城といふ所の園頭園といふ
へ到つたる時小其所小工師子と有るうら大工の様と
のと見えすけ其の名といふ周那といふが釋迦の所へ來
て例の頭面礼呈し云ふ小ハ明日私方小於て食を進ト
度いうら來て下されと請待するも下釋迦はうあづい
て承知し教し其の翌日法服を着て手小鉢を持ち大衆を
圍繞て其の周那の舎小行たす所小周那ハ程なく飲食を
設て釋迦小供小連れた坊主共小食して叔別小梅檀

樹の再ハ世小孫く子物下ヨサレと云てそれを煮て釋迦小
う釈たでヨサレ所不釋迦と為小説法すと有るは是ハ珍
味とく釈て奈るいおと懐び舌打と教して食つた事と見
える下ヨサレ扱色々と教して夫より弟子共と其の家と出
てら釈ハ大勢馳走小ありしはた杯と大さふ顔とく帰
りしけ中逢小ある木の下小供つて阿難小云小吾いろ
ある事小う疾く生じて背がいろ小痛小成つてさうと歩
り釈ぬら其方此所へ坐とくいろ小顔と死そふ顔
とくして云小そく阿難小膝とつていろ小顔と死そふ顔
小供つたる菌の毒小あたらしく也たと見えす扱と憎小
奴らふとけしとふい物と佛小進つてら釈ハ極めけあな

たハくして涅槃と取らるゝてまりまやうと云ふと釋迦
ハ阿難が口ととりて又此時と負惜と云つた下ヨサレそ
釈ハいやく阿難お母一人存事を云ふと勿れ周那ハ
おまふあの木の子と吳釈ておまハそれが為小死ねハ彼
釈ハ大吾小利と得又壽命とと得ることと也夫ハいふ小
と云ふ小吾初て成道せんとする時食を吳釈たる女又此
度此食の為小威度小及べハ此二つの功德正等して其
の施し吳釈たる人の利とある事ト也小うつてそん事
いやふふと云つた下ヨサレ長阿是ハ連と菌の毒小中つて
年ハ取て居るふり連も今度ハよくあるまいと自分と決
定してらあせ阿難がそん事と云ひ立てしてハ意地也

たふくそん存食いつけしせぬ物を食たふらトヤと人小
とさけしヨれ事故うやうの負惜を云て口と止めた
と見えろでヨんられが負惜トヤと云ふ譯いいうし
彼の座禪の苦行小瘦さうほつたる時牧牛女が乳糜と吳
乳たるのミ功德キもあらふう人小毒を食して殺して何
の功德キもあらまいでヨル實ハミたく世小久しく居て
善來比丘とたな、う拵へる積りで居る所と毒殺せられ
たらら彼の我慢者でハある心の中ハ咽笛へも喰ひ付
さたらうたらうたてヨん又此時のたうち廻つてた、ら
苦んたが周那ハ寄り付せしせぬと見汰ハ心ありて毒物
を食りた事と見えろでヨル若しさうありハ此周那と

云ふ者の余程見解の有る者でヨル扱釋迦ハ其うち小頻
リと大病小成つて是ハ世しいうぬ事と覺悟したる事と
見えろ自ら法服をぬいハ藝で夫をいって其の上小右脇
小偃して長河日頃手あり持たる所の鉢と錫杖とハ阿
難小付属經胎諸ろ比丘共小云ふハ諸善男子能く其
心と修して仕たる儘の放逸と致す事勿し我今背の疾ハ
小テ惣身痛くたまたらすと云て苦く經槃そら下諸ろ
比丘等ハ何故小一切と半劫と此世小おりにて我等を教
導さるぬぬの中といつたる所を釋迦云ふハ吾ハ
無上の正法ハ悉く己小大迦葉小付属して有る程小吾ハ
如く其方共と教導する下あうと云て頻とまづ死んだ

下ヨリ統記爰小於下棺小納めておくと轎して中より手を
出し々阿難小問ふて迦葉舍利弗ハ来たると云ふでヨリ
所より此迦葉ハ此前より弟子五百人と耆闍崛山と云ふ
所一行て居り合さぬ夾故是ハ第一の弟子の事故思ハく
思つて死ハねたハと見えりてヨリ又舍利弗ハ此前小早く
死ハんハ疾ハ小ハ死ハんハ下ヨリ夫と来たると云て尋ねたのハ
是ハ秘藏の弟子であつたる故ホ也ハほけりてまだ死ハな
ぬ事小思ひまハつたハものでエハ又薩婆多論と云ふ依
下考つたる所ハ此舍利弗と目連ハ疾く死ハんハたる時小此
二人ハ大弟子の事故其教ハらんたる弟子共ハ散乱ハて
しまハいさう下あつたる故釋迦ハ其散乱ハさハやうふハて

この神通で舍利弗目連の二人を化作して左右小おつた
る故皆ハ悦んで扱ハ舍利弗目連ハ死ハんハだと思つたハ死
ぬと云て散乱せあんたといひハことハ有るハやうの手妻
と申つたる事さハ忘るハ、とハ怪ハしハうらぬやハほけりハ
あハ下ヨリハそハうハ阿難ハつハ小ハ迦葉ハ未だ至らハ舍利
弗ハとく涅槃小入りハまハしてヨリと云ふたハ釋迦ハ又
云ふハハ我今永取滅度といつて即ち手を引込ハて此後
ハ何ハもハいはず静ハ下あつたといひハこハ下ヨリハ經胎此我
今永取滅度といつたる意も兔角迦葉等小死目小あはぬ
事を思つての事と見えてらんハあけ者ハてハらハハ
不便ハらハ下ヨリハ佛好ハる輩ハらハと能く思ハふハ事

てユカハ本より心ヲけたる老病死苦を離り、事も出来ぬ
ハ又阿羅邏と問答の時一切の想を捨てて亦凍着し生
い杯と口ハ立派云つたりと此死う福も所を見て
受情ハ捨らぬものある事を知るがよいかユカハ叔此の
死ぬ時の事を涅槃経に有る如く寢卧たる所下迦葉云
ふハ如來已免一切諸病苦患無有病云何默然右脇而卧
當為九十五種之外道所輕慢沙門瞿曇無常所遷といつた
叔ハ釋迦をむくと起て結伽趺座して其顔貌甚たうろ
ハしく大光明を放て其光が百二十の日輪より光て虚
空ハ充滿して叔迦葉告て云ふハ諸衆生不知大乗方
等密語便謂如來真實有疾故今依小病と示現して見せ

て世間法を示すの如しと云て了らる説法したるが
有るが皆後世の大乗の経々と造る好僧共の其大乗小重
を付りよふとて偽りのつたる事共で偽りてユカハ實小
迦葉ハ此時居合さあつた者と此様小作り事と申た者
ハユカハ
叔釋迦の身体ハ無量の金色大光明を放つたといふ事夫
と隨心の羅漢弟子といふ小はうり左様小見たり未だ釋
迦を深く信せぬ者の罪が深いハ依て釋迦をハ灰色羸婆
羅門と見えたと云ふ事を觀佛三昧經といふ小見たり有
るがユカハ合点のゆゑね事ハユカハみせといふ小實以て金
色大光明のうらだるらハ信心不信心者ありて一様

不見えさうふ事や^ニ然^ル乃^レ小^レやうのつたて^テ有^ルと
いふ^ハつらく考^ルる小^レ信^ス者^ハ迷^ヒ小^レ依^テ金色大光
明^ノうらた^ト見^ル信^セぬ者^ハ迷^ハぬ^ハよ^ク有^ル儘
小^レ灰色^ノ神^セ法師^ト見^ルえ^ルや^ハ思^ハふ^ハ思^ハふ^ハ是^ハ
是^ハ小^レちやうと^ハ狐狸^ノ人^トと^シて居^ルと^ハ人^間ハ^智と^ハ小^レ
惑^ハい^クさ^ノ有^ル故^ニ其^ノ眼^ヲ掠^メら^シて^其の^狐狸^ト人^ト
と^見る^セや^ハ結^句犬^ノと^ハ狐狸^ハ一向^ナら^ズと^ハ執^ス
飛^擧つ^テ喘^ミ伏^セめ^やう^ハ事^ハ洞^々有^ルと^ハめ^ダそ^レん
互^ニ譯^スハ^ハ思^ハふ^ハ思^ハふ^ハ事^ハ釋^迦の^若い^ウち^ハ
互^ニ思^ハふ^ハ事^ハ有^ルハ^ハ釋^迦の^若い^ウち^ハ
根^氣強^クう^やう^ハ小^レ神通^トも^やつ^テ居^ルた^ハ年^ノ寄^ル小^レ随^テ

根^氣と^薄く^あり^つひ^ハ他^ノの^尾尾^トあ^らう^ハた^ハ下^ニ云^ハん^ハ
増^一阿^含經^ノ十^ハ八^ハ小^レ阿^難以^テ手^ヲ摩^シ佛^足言^ハ天^尊之^體何^レ故^ニ
極^緩不^如本^故佛^言夫^レ受^ハ形^體為^病所^逼と^ハい^ふと^ハ見^ルえ^又
中^阿含^經小^ハ佛^遊王^舍城^告諸^比丘^我今^年老^體轉^衰弊^壽
過^垂訖^と云^ハつ^た事^ト有^ル下^ニ云^ハん^ハコ^リヤ^年の^寄る^ハ小^レ從^テ根^氣
氣^ト續^クや^ハ神^通と^やり^おほ^せら^れた^ハ事^ト見^ルえ^る下^ニ
云^ハん^ハあ^んと^佛小^ハ常^少不^老の^德あり^とい^ふ事^ト外^ノの^經
論^トも^小有^ルが^コリ^ヤさ^うだ^られ^し後^世の^坊主^共の^色
色^トせ^つふ^ハ理^屈を^付け^て尻^口と^結ぶ^ふたり^ハ共^ニ
一^ツと^いひ^得た^ハ説^ハ無^イで^コリ^ヤね^様小^レ老^衰し^つ、年^ハ
八^十の^時て^んと^床へ^就いた^ハ下^ニ云^ハん^ハ夫^レハ^大般^涅槃^經と^云

小経小我今背疾擧體皆痛我今欲卧如彼小兒及常患者と
いつて右脇小卧たといふ事ある然るを後世の僧共が
又説を作つて大論杯小佛ハ金剛の體を此ハ實ハ病の
といふ事ハあり此共方便して病悩を有るやうに示現し
たものトヤある、いつたでコヤ然此共コヤ申結句具負
のいふ例しといふ者下ちやうと儒者が聖人を牽倒すこ
同トヤうふ事トコヤん實ハ釋迦も其の健を在つた時
あそちうさの道のいひことを其行を繕ひしたふ此
共死期ハ及ひてハ其真心の現ハ此を斯く有るべ
き事トコヤん彼の佛も元ハ凡夫ありといふ事ハあ此共元
はこり下ふく實もつて始終凡夫ト只化て居つたのこれ

事トヤちの死期ハ及んでハこうも有りそふ事彼の四
十餘年未顯真實をこの下あらはたのでコヤん彼の今
ハのいわふ成りて阿難ハ水と興つる時其の聲も幽らふ
あらた此ハこそ阿難が聞つたらぬ事杯思ひ出るトつけて
も不便なる事トコヤん然るを後世の坊主共ハ釋迦より
も尚日高くうまつて我らち小悟りうまつて去らうくさ
きたが執言とハ吐散し命や命とおとすら下も其の真心
と包て隠して世を終らハぬ執しく情のこでコヤん
さとるつ事もふせとさとらんと
あらふころをそこらいるらる
叔釋迦ハといふ死だる時もあらで阿難がとうふ事と

志たてヨサハ夫ハ佛の陰藏相と出して女人不示すと有つて釋迦の陰莖と出して諸所の女人不見せたりてヨサハ阿難の心小諸所の女共此の陰莖を見たりハ女人の形と取て男子の形と得たく思て佛道と修行する心不成就ふことの心しらびてあつたことハ事下ヨサハ扱其の翌朝阿那律とヨサ弟子が阿難ハヨサことハ汝王舎城ハ入て諸の未羅事ハ此ハ働人のハ佛の威度と語て頼む可きいとヨサとヨサ阿難ハ泣々城ハ入て諸の未羅共の一所ハをつた五所ハ行た所ハ夫等がヨサハ朝早く何の用有つて来たをヨサの時ハ阿難がヨサハ如來昨夜已ハ滅度せられたハ依て来てくりヤれとヨサと是等がヨサハ

あつてさう急ハ死んだ事ハや杯といひて是等ハ掛つてとりつらハ天冠寺とヨサ寺ハ持て行て火葬せんと志て薪ハ油を注ぎ杯して火をうけたる所ハいつハ燃付らんヨサ阿那律がヨサハ是ハ大迦葉ハ五百弟子と遠く一行て居るヨサ夫と持て火ハ燃えぬ下あらふと云て止させたりハヨサハ是ハ彼のねぢ付心のりりうたまるたハ所よりヨサハの験もあつたりハヨサ隨分今の世ハも執念深く思ひをとりた者ハヨサハの事ハあつたもの下有りさうなことハヨサハ扱らハ彼の迦葉ハ五百の弟子共と耆闍屈山とヨサハ所ハ是ハ拘尸城と雜多ハことハ五里程ありハ道と弘めてとつたる所ハ何と云く心さわら

が致す故釋迦の事な氣不あり彼の大勢の弟子共と釋迦
のをつたる拘尸城へと急ぎ来る其の路下一人の婆羅門
法師が手小曼陀羅華といふ花を持て来る小行逢てそち
はちちうら来たる不我師の何所小あると問ふた所が夫
可答て我ハ拘尸城うら来たる其の方の師ハ蘭の毒小あ
たらつて既小涅槃小入て七月を経たといつたでユカルそこ
下迦葉ハ大き小力を落しあけいて善導善導遊遊衆衆生生顛顛墜墜せ
んと云つた釈巴う小思ひの外ある事の有るハ其の迦
葉小徒て来たる弟子共の更小相賀してと或るうら互小
悦ひと云て如來の寂滅してハ吾ハ曾もハ犯す事有つて
も誰訶制する者とあくら釈うらハ安樂小ありこととや

といつたさう小事ハユス其の時迦葉もあは釈顔も極
々さうしたると思へ深く更小感傷したと有るで是
統西うらとよく佛佛ずずの輩小見せしと聞聞うせしと釋
迦の教といふものハ人情小相反りて居る事をさうら
たひもの下ユカンヤうく釋迦が死死ちち也也否否や其垣内小徒ひ
とつたる者共下すうやう小歡ひとりし程の事でユカン
是ハさうし有ませうで其師たる迦葉ハ釋迦ハ神通小た
りけて弟子と成つたる釈ふし此弟子共ハ釋迦とさしし
信する心も無うた所を師匠とやりく小思ひしうけす
善來比丘善來比丘小さ釈たこと故悔しくも有つたらふ其の生
て居るうちハいつたといつたとと釋迦ハ嚴しく神通をやつ

てうらさめ小あけすいやくあるら小比丘來とある
て居つたるらと故死たと聞いてハ歡びとしさうあるもの
下云

叔迦葉が拘尸城へ着いたハ釋迦が死して七日目で云は是
不付けハ彼の偽りの経々小釋迦が涅槃の時小眉闍らう
大光明を發して又其の涅槃を告んとて大きい聲をあけ
て呼たる所其聲大千三千世界小有りとあらゆる者の
耳小聞えて梵天帝釋四天と始のあらゆる鬼神諸天及び
鳥獸虫の類ひまで死小目小逢ふとて集つた杯と有り
すすら夫程大きき聲又其の光るといふと四十里中
り先小居る第一の弟子たる迦葉が所一見え聞えまんた

事又四十里をうりの道ハ彼の神足とやうに飛行した
らうハ瞬くうち来て就さうあるものや七日う
つて來るとハ是らとてたると實ハ此時釋迦ハ一向
小いくちと無く成果を日比の神通ハ一つを也出す又よ
り添て居たもやうハ阿難と阿那律と四五人位と見える
下云ん又故阿那律が死骸の番として居て阿難が直小人
頼小行つた下云ん又或人の説小釋迦ハ山中の木の下
へのたれ死して七日の間うつちやて置いたる故鳥獸
虫杯したうつてつと散らした所を徳化小依つてそん
る物の寄集つたらち小涅槃の圖ハういた物とやと云
ひすは是ハ惡口のやうたが實小さうと知れぬて

コト云て釋迦の死に日二月十五日あり秋共天竺の二月
と云て七御國の土用の中の様ト云う直さ子蛆とわく
事下ニヤ

叔迦葉ハ彼の天冠寺へ行て阿難小逢て釋迦の死骸を見
中うと云つた時小阿難がソハ棺小くまうたうら見
せら執ぬとソハ時小迦葉ハ棺小向た所う棺の中うら西
足をぬつと出したでコト迦葉が夫と見るとおうら五色
あひどやふらつて阿難小佛のうらたハ紫磨黄金の膚で
あつたがぞりてらんるさうら五色あひどやとソハ
らて阿難がソハ向小一人の老婆がらう小来て泣悲
んで佛身の上小涙を落したる故小色が異つたのぞやと

答つたといふ事でもコトヤハ是ハ涙と落した故でも何
でもありやせん達者下居た時ハ彼の神通でさき見せた
る釈も死んでハ神通とせぬら色あわちくありハ知
きた事下コトハ釈と迦葉が本らう小金色であつたと思
ふたうらうをうらてコトらんるのちまじや小依て比
丘来小さ釈たでコト叔迦葉ハ其の棺小向て彼の足を例
の如く頂いた釈ハ引込ましたといふ事下コトハ一俤此兩
足を出したといふ事とさうら事たハ執念深い心小出
らる事ハ實小有つたといふ知れぬら是ハさき疑小ハ
さ事下ハありてコト時小棺の四方小薪を積下雙迦葉ハ
佛所教化人 所度已周遍 我行道絶向 唯恨不見佛

と云ふやうの何れもあつた事と云つた七市して手火を放つ
たる所を今度よく燃ちてヨサ震胎經
叔釋迦の死ミナツた年が怪しく云ふ異説の有る事で實にちつ
とも古き人小うたいといふ僧共の心うらうて色々と聲
強附會としたりたもので其説今でハ周の穆王が五十三年の
二月十五日と定つたやうな事とも萬と調つて見たる所
が周の穆王が五十三年よりハ五百年餘りも後の事で是
をこれいふので知れたると申すハ漢土の漢武帝といふ
當時ハ隱士趙伯休と云ふ者が天竺の地方へ行て律師弘
度といふ人に出逢て衆聖點記といふ書物を得たてヨサ
是ハ釋迦の身まうつた年の七月十五日ハ何と云ふ黒點

を付て又より年毎の七月十五日ハあるとハ一點を記す
の例と成つて其後代々の佳職が其の通りホして傳はつ
てあつたをこれハ此衆生點記でヨサるもので彼の趙伯休ハ
其の書と得て彼の星を勘定して見たる所が九百七十五
點有つて前代齊の永明七年七月十五日までの點が有つ
たと云ふのでヨサる下ヨサる爰ハ於て釋迦の年代と繰り上げ繰
りかへると生れ年と身まうつた年と今年迄何年ハあると
云ふ事まへにやんと云うる下ヨサるまへ其の死たる年が
佛國下の懿徳天皇の御即位あをばしてハ二十五年目
漢土下の周の敬王といつた王の三十四年ハ當る又其の
身まうつた年が七十九歳下あつた故にこれハ七十九

年繰上げると其生れたる年を御國でハ綏靖天皇の御位
不師つて遊ハドてうう十七年目漢土で周の靈王といつ
た王の第六年小當るさす秋ハ釋迦が身まうつてううハ
此の文化十三年丙子年近ハ二千三百年程ハあるデヨカ
成程余は古さハふ多い事さう僧共ハ兎角一年と先
へ送りたうつて彼れ是といひ終らざつと六百年程も
うけねと云つてとるうとてエカ

出定笑語講本二終

